「ひろがる町工場」

高崎ART製造PROJECTカロエ 代表 山﨑将臣

第6回

速度でひろがる

フランスの哲学者、ジル・ドゥルーズの「速くあれたとえその場を動かぬ時も」という言葉が私の座右の銘です。

速度（動き）が点（0次元）を線（1次元）に変容させるように、私のような小さな町工場の若輩な経営者でも立ち止まらず挑戦し続けた結果、現在のカロエという線ができたこと。

カロエという線が今後波を打って動き始めればその軌跡は面となり次元を超えて広がっていく。そうして広がる人との出会いと、可能性と、次々現れる展開が、多岐多端（たきたたん）とし、ますます充実した仕事に引き合わせてくれる。

国内よりも海外の展示会への出展が多いという、町工場の板金加工屋にしては珍しい事例に違いない、私の本籍「精密板金山崎制作所」は今回、またまた行政や地域の企業様にお誘いとお力添えをいただきまして、東京ビッグサイトで開催された、国内最大のものづくり展示会である第19回機械要素技術展（6月24－26日）に初出展してまいりました。

この展示会には国内外様々な機械要素・加工技術を持った製造業者が1520社出展し、我が群馬県からは群馬県ブース25社、高崎市中小企業振興協議会のブースで8社、単独13社の出展があり、私は日頃からお付き合いのある先輩諸兄らとともに高崎市のブースで展示商談をさせていただいた。

主には図面化された部品の加工を受注して製作することを生業とする弊社ですが、今回の展示会は図面の受注を何枚取るかではなく、何人の方に面白い会社があったと覚えていただけるかに目的を絞った。

全部見て回るには2～3日かかるであろうこの広大な展示会場で、規模も設備も上を行く国内の同業他社と似たような展示をして、その他大勢の一つになるのはたやすい。一瞬すれ違う来場者に突出した存在感を感じてもらうために、自社ならではの「ものづくり」を工夫して展示ブースを作っているところに、やはり人が立ち止まるものだ。

言葉の壁がある海外の展示会に出てきた結果気が付いた。少々派手であろうが、目立って注目を集めることは悪いことではなく、何も遠慮をすることではないということを。過去国内の展示会に出展した際の集客との差でも感じる。

こうした展示会にかける費用や労力を惜しんで外に向けた発信を一切してこなかった弊社も、少々本業とは離れた様々な活動にも挑戦し続けてきた成果を、独自性として強みに変え、効果的な広報活動と受注案件の成果を獲得するほか、付加価値を生み出すための人材の獲得や、新事業創出の企画などが数多く飛び出すほどの効果を生み出している。

有為転変の世の中、皆さまにも自らに速度を与えて点を動かし、軌跡で線を描くことで新たな機会に出会っていただきたい。

「デザイン板金」がテーマの山崎製作所展示ブース

【略歴】 05年に精密板金加工業で家業である山崎製作所に入社。11年5月カロエ発足。現在、精密板金・プレス・鋳造・メッキ・木工・皮革・電気・建築の分野から13社のメンバーと他分野のデザイナーで構成されている。